

令和5・6年度 第5回「おおた生涯学習推進プラン」推進会議

議事要旨

日時 令和6年10月30日（水）午後2時から午後4時まで
場所 消費者生活センター1階教室
出席者 名和田委員（会長）、倉持委員（副会長）、海老澤委員、加藤委員、
鴨志田委員、小林委員、竹山委員、豊島委員、中野委員、野川委員、
山本委員 ※石垣委員、大島委員、広田委員欠席（役職・50音順）

1 開会

（1）会長挨拶

このところ、大田区にもよそ者ながらそれなりになじんできた気分がしている。先日も田園調布特別出張所で自治会町会の会長の前で講演をさせてもらった。

大田区っていい地域だとつくづく思う。地域福祉の分野とも関係ができ、色々な側面から勉強したいと思っている。その中でもこの生涯学習プランが一番長い付き合い。今日も勉強させていただきたい。皆様方の活発な議論を期待し、その中からさらに学ぶというスタンスで議事進行をしたいと思う。

（2）会議の公開について

推進会議設置要綱第7条に「策定会議は、原則として公開とする。ただし、
1 公開することにより公正かつ中立な審議に著しい支障を及ぼすおそれがあると認められる場合、
2 特定の者に不当な利益又は不利益をもたらすおそれがあると認められる場合、
3 会議の内容に個人情報が含まれている場合は、会議の全部又は一部を非公開とすることができる」とある。本日の会議の内容には、それらに該当する内容は含まれていないため、本日の会議は公開とする。会議の内容については、議事要旨を作成し、各委員に確認のうえ区ホームページに公開する。

2 議題

(1) 議題1 「地域の学びの場のあり方検討報告書」素案について

【会長】

事務局から説明をお願いします。

【事務局】

資料2～4に基づき、説明。

【会長】

事務局から素案の修正について説明があったが、質問、意見があったらお願いしたい。ご自分の意見が適切に反映されているか、あるいはその後気が付いた点など。ご自由に発言いただきたい。

(意見・質問なし)

(2) 議題2 地域の学びの場の「人」について

【会長】

資料3意見一覧にもあったが、「要の人」はこれまでの会議やワークショップで出てきた表現ではあるが、イメージがしづらいかもしれない。学びの場がその機能を果たすために、そこに関わる「人」について、もう少し掘り下げておきたい。その結果を報告書に盛り込んで、充実させたい。まずは、意見交換用の資料について、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

資料5に基づき、説明。

学びの場の機能として育成される「要の人」は、職員以外の施設内外で地域の学びをサポートする人材というように整理してはどうかと考えている。これまでの会議、ワークショップ等では、つなぐ人、お世話役、コミュニケーター等と表現されていた。

施設と地域の人たちの間で、独自のネットワークを持って活動している人のイメージ。どんな動き方をする人材なのかについては、後ほど意見交換で掘り下げていただきたい。

生涯学習サポーターの養成としては、養成講座、相談員活動・研修、生涯学習ボランティア登録と区民プロデュース講座（個人向け）、人材交流会、生涯学習のつどい等を行っている。これらの事業を通して、自ら学び、学びを通し

たつながりや学びから発展する活動を地域で展開する人、いわゆる「学ぶ・つなげる人」を育成している。

「生涯学習サポーター養成講座」、「相談員活動・研修」をどのような意図を持って実施しているか、社会教育主事、社会教育指導員から説明する。

【事務局：社会教育主事】

大田区の区民の学習の歴史は 70 年を超える蓄積があり、現在に至っている。中でもおおた区民大学は、一斉に大人が学ぶ場だったので、色々なテーマに関心がある区民が集まっていたが、時代とともに区民が学習する課題を掘り下げ、それを生活者目線で進めようという区民が企画に参加する形式の講座もあった。

区民が課題を出し合って、職員とともに講座を企画する、受け身ではなくて主体者として学びに取り組む企画員講座を実施してきた。この中では、参加者同士がプログラムの内容、運営などについて合意形成を図る過程にも学びがあり、結果的に人材育成につながっていた。

生涯学習サポーター養成講座の受講者には、二つの要素があると説明している。一つは生涯学習のサポーターとして広く区民の生涯学習や社会教育を支援する立場、もう一つは参加者自身が楽しみながら学び続けること、学んだ成果を可能な限り地域に生かしていく、そういう存在になってもらうということ、これらが大田区の生涯学習の人材育成であると認識してもらっている。この講座を修了した方は、学び自体の楽しさ、深さを実感し、それぞれの人が住んでいる地域に持って帰ってもらう、そのことによってその人の身の回りの人達などに、生涯学習の裾野が広がっていくという効果がある。講座修了者は、生涯学習相談員や生涯学習ボランティアとして登録する制度もあり、講座で学んだことを地域の活動に生かすための受け皿も用意している。

【社会教育指導員】

生涯学習サポーター養成講座の担当をしている。講座の参加者は、50代から70代の方が多い。参加動機は大きく二つあると考えている。一つは地域で何か役に立ちたいという方々。もう一つは、地域を知りたい、自分が楽しみたい、誰かとつながりたいという方。引退した方、転入してきて周りに知り合いがいないという人もいる。どちらが良いということはなく、全12回の講座の中でそれぞれの方の考え方が変わることもある。自分が学びの楽しさを知らないと

広げることができないし、自分が楽しいからこそ周りを巻き込むことができるので、担当者としては、それを支援していくことに力を入れている。

ある参加者は、定年退職してからこの講座に参加した。最初は、自己紹介で就職面接のようにご自身の経歴を話すなどかまごまった様子だったが、様々な人と関わるうちに、これまで興味がなかった区の講座やイベントに目が向くようになり、相談員の活動も始めていた。その方の言葉で印象的だったのは、企業では60代だと年寄りだが、地域社会ではひよっこだということ。80代、90代でも頑張っている人がいるので、自分もこれからだと、今が人生で一番楽しいとおっしゃっていた。

別の参加者は、サポーター養成講座を通じて人とつながるきっかけができた。すすめられたものは受け止めてやってみると、そこにつながりができていくのが楽しいとおっしゃっていた。周りの人からも、その方が楽しそうにサークル活動をするのを見て、触発されて自分も活動を始めたという話があった。

【事務局】

次に、社会の多様な分野における学習活動で広く活躍する人材として期待されている社会教育士について、副会長からご紹介いただく。

【副会長】

(資料6 ページについて) 今回の検討で、地域の学びの場の役割として、学びのきっかけ・継続を支援する、つながり・仲間づくりの場をつくる、発見・創造の機会を提供するとしてきたが、このプロセスの中で、今は「要の人」と言い方をしているが、つなぎ目となる人が重要ということが出てきた。

ここ数年、国の動向として生涯学習社会をつくるうえで、人材が非常に重要と認識されている。その人材を幅広く捉えて、様々な領域や立場で社会教育の知識と技能をもって、学びの場を広げていく、そういった人材を育てていくことについて検討が進められている。今回の会議の議論の参考になるかと思い、情報共有したい。

近年、まちづくりやつながりの希薄化ということが言われるなか、学びが地域づくりにもつながっていくということに関心が高まっている。社会教育の学びを色々な人たちに生かしてもらおうということで、社会教育士という称号が2020年4月に新設された。

大学で社会教育主事の養成課程を修了ないし社会人が社会教育主事講習を受講すると、社会教育士という称号を名乗ることができる。社会教育の学びを行政職員として、教育委員会の事務局だけでなく色々な部署において生かせる。教育機関においても、学校と地域をつなぐ、子どもと大人をつなぐというような連携協働事業がもっとスムーズに進む可能性がある。また、企業、NPO等民間で、あるいは地域で学びを通じて人をつなげ、地域づくりにつなげていくという観点を持つ人がいることによって、学びあいや色々な組織の協働を促すといった役割を果たしてもらうことを期待して、この仕組みが作られている。

2020年度から育成制度が始まり、少しずつ社会教育士の称号を持つ方が生まれてきている段階。もっとこれを広げていこうということで、中央教育審議会生涯学習分科会でも議論されているという状況。

(資料7ページについて) 様々な社会教育の担い手が連携していることを表している。生涯学習センターと地域の文化センターをつないだ地域の学びの場の連携イメージと重なると思っている。

それぞれのコミュニティ、部署(社会教育施設、学校)、団体や民間の企業等それぞれのところに社会教育に携わる人たち、つなぎの人、要の人、世話役がいて、その人同士をつなぎ合うことによって、個人の生涯学習の機会を増やすとともに、地域づくり、つながりづくりと広げていく、そういった人材に関するイメージ図となっている。

こうした社会教育の人材をどういうふうに育てるのかということに話を発展させていくと、先ほど言った社会教育士というのは、一定の教育機関、大学等の教育機関で系統的に学んだ方ということで、それなりの信用性をそこに持っているということがあるが、生涯学習に関する民間の通信教育などで学ぶという方法もある。

先ほど、生涯学習サポーター養成について説明があったように、区のほうでこうした養成講座を持って、それによって人材を育成するという形もある。これまで議論してきたように、つなぎ人、コミュニケーター、お世話役の人というのは、必ずしも何らかの講座、養成講座とか、その大学の授業を受けるという養成の仕方だけではないと考えている。

まさに、ネットワークの中で育成されるということもあるのではないかというの

が、職場で言うとOJTのようなものがあると思うが、地域の中でもそれと研修会みたいなことの組合せで、地域の中で人が育っていくということがあり得る。よく目にする一つの例として、ある市の公民館運営協議会の委員長さんを思い浮かべる。運営協議会には、町会長、近隣の校長先生等地域の関係者や利用団体の代表等が入って公民館の運営について議論する組織。

例えば、今一緒にやっている委員長さんは、元々は前の町会長が連れてきた方。どうやら近所に最近定年退職して家にいる人がいると、その人は現職時代会計部門をやっていて、非常にお金に強い人だと、リーダーシップもある方だということを地域のネットワークで見出し、自分が地域の活動をするときに連れて行って地域の人とつないでいった。

その町会長は、公民館も地域活動には重要ということで、生涯学習、社会教育活動にも引っ張り出していった。そのように一緒にめぐっていく中で、顔のつながり、ネットワークができた。一定期間そういった経験を積んで、自治会の会計をやり、その後町会長になって、公民館の会長にもということで声をかけられた。

最初は、地域のことは少し分かってきたが、生涯学習のことは全く分からないと言っていた。自分が役職を担うのだったら知らないといけないということで、自ら積極的にそういう場を求め、勉強していた。学びを自分の拠点にも生かしていくというのを、繰り返しながら学んでいた。今では、本当にその人なしではその館の活動は語れない、あるいはその人に相談すると色々な人を紹介してもらえるとというまさに要の人、世話人というようになっている。

その方は、スタートの段階で養成講座を修了した、資格を持っていたというわけではないが、ガイド役がいて、色々な開かれた学びの場が周りにあったことで、まさに地域のハブとなるような人材として育ったと感じている。

今日、この要の人、地域の学びの場の人について議論して、それをどう育てるか、育成するかということについても報告書の一つの大きなポイントだと思うが、少し参考になればと思い紹介した。

【事務局】

(資料8ページについて) (1) 要の人の養成の言い換えについて、①番は要の人はどのような動きをする人か、事務局案として示している。

自ら学習、活動している。他者が学びに参加するきっかけをつくる。運営主体と

して参画する。例えば、文化センターの利用者連絡会など。また団体間、また外部との調整や取りまとめを行う、このような言葉が推進会議の中で出てきていた。

学習や活動には多様な関わり方、人それぞれの学習の形態がある。その上で、学びの場の運営側という視点で関わる人材、そういう方が重要ということもこれまでの推進会議で出てきている。

右側の図は、要の人の立ち位置をイメージしている。地域の学びの場では、様々な年代やライフスタイルの人が、それぞれ居心地のよい関わり方ですとか、過ごし方をしている。そういった空間、関係の中で、お世話役的な役割を担う人が、これまで言われている要の人となるのではないか。矢印で示している職員と、学び・つなげる人の中間の人を示している。

これまで推進会議、一般区民の方も含めたワークショップで出てきた学びの場に対する意見を幾つか挙げると、継続性や世代交代できる仕組みが重要という声が出ている。また、そういう学びの場に対する信頼関係をどうやって構築するか、また文化センターを含めた施設の利用者がお客様として利用するのではなく、当事者、または主体者となるような働きかけが必要というような意見が出ていた。これらも、学びの場の人というところに関わることからであると考えている。

先ほど紹介した生涯学習サポーター養成講座の課程の中でも、この図の一番外側に示す学び・つなげる人の円が広がって行って、その中から例えば文化センターなどを拠点として、利用者の活動を支援する人が出てきたり、新たな役割を得る人が出てきたり、それらの役割を、年を経るごとに別の人が担っていくというように役割が循環していく、すなわち世代交代ができていくと考えている。

また、利用者自らが運営に関わっていくことによって、新たな人にとって敷居が下がるようにつながるのではないか。運営に関わることによって、自分の意見が反映されていく、自分が肯定されていくというような経験を持って、施設やそこに集う人々に対する信頼感が生まれてくると思われる。職員には、そのような動きや循環が生まれるように自然な形で働きかけをするという重要な役割があると思う。

以上、要の人のイメージについてこちらをたたき台として、後ほど議論いただきたい。

要の人をどのように言い換えるか、事務局案を示した。これまでの推進会議、ワークショップで上がった案の中から、つなぎ役、推進役などが共通な言葉ではない

かと考えたが、後ほど議論いただきたい。また、養成という言葉について、「育成・支援」と言い換えたいと考えている。

もともと地域の別の分野で活動している人に生涯学習に関する情報を提供したり、学びの担い手になってもらったり、地域で学習や活動している人と連携、また支援していくことによって、学びの担い手自体を増やすということも含めて、育成支援と言い換えたい。

育成・支援は、文化センター、生涯学習センターの重点的な機能としているが、具体的に取り組むことは異なる。

文化センターは、身近で日常的な活動拠点として、活動に関する助言、支援を行う。その人たちが文化センターと連携して、地域で学習や地域の活動を展開することで、文化センターを知る人がさらに増えていく。多くの人の学びのきっかけになることができる、と考えている。

生涯学習センターでは、各地域で活動する担い手の育成やフォローアップをする、また交流の場をつくっていくということを行う。担い手の育成・支援に当たる職員向けの研修、情報の共有の機会を提供する。日頃から他の地域のよい事例を共有したり、必要に応じて協力することができる関係が構築されたりすることで、継続的に担い手を育成・支援するということができる。

【会長】

事務局から説明があったことについて意見交換をしていきたい。要の人について、イメージを豊富に、大分ここで議論していただいているが、さらに深めたいということ。それから要の人という言い方について、別な言葉のほうがいいのではないか、ということで具体的な案についても、3つの事務局案が示されている。

それから、養成という言葉これまで使ってきたが、育成・支援のほうが良いのではないかという提案もあった。さらに、文化センターや生涯学習センターの機能の違いについても考えておきたい。

これらは、個々、別々に議論しても構わないし、それから言い方、こういうふう言い換えたいという提案があるところについては、それ自体、そこにポイントを当てて議論しなければならないが、まずは、説明のあった全体について、恐らく全体について議論するという事は、要の人などのイメージを膨らませるということに実態的にはなるかと思うが、ちょっとそこを中心に、少し自由に議論いただき

たい。

【委員】

長い間自治会を預かっているが、関わるきっかけは、小学校のPTA会長をやってから。学校の行事に参加すれば良いのかと思っていたが、そういうわけにはいかなかった。今困っていることは、担い手が不足していること。高齢化も進んでおり、自治会の行事で、交通安全運動、火災予防運動などがあるが、運営もままならなくなっている。防災部長、防犯部長、交通部長など部長はいるが、部員がいない。一回役員になると大変忙しい。若い人の新しい発想が必要であり、意見を聴く機会を作らないといけないと考えている。

【会長】

地域の中で色々な役の人が連携して横のつながりを作る、それで初めて地域コミュニティが成り立つと思う。そういうことをどうしてやらないといけないのかと思いながら長年やってこられて、やはりそういうことが必要と考えていらっしゃる、大変感慨深い。

地域の人材不足について言及されていたが、どこに行ってもこの話題になる。やはり私も地域コミュニティの色々な分野の、社会教育だけではなくて学校教育とか福祉とか、まちづくりとか、いろんな分野をこれまで少しずつ勉強してきたが、社会教育、生涯学習というのは一番入りやすい切り口だと思う。だから、地域福祉でも、入り口はやはり学習。結局、何となく、だから社会教育分野と同じようなことをやっているということがよくある。その意味では、今、委員がおっしゃったのは、かなりの社会教育というか、生涯学習の地に足ついた活動から輪を広げていくということが必要であるということなのかと感じた。

【委員】

私は、社会教育士の養成大学に所属していて、理論的なものを大学の講義で学び、そして実習を公民館で行って、そのことを振り返りながら、要の人のイメージを考えた。そういう要の人と関わるときに、相談を受けてくれると思った。その相談というのは、最初活動を始めるときの相談、活動一回終えた、例えば講座に参加したら、講座参加した後、どうだったか、またどんなことが重要だったと思うかとか、どんなことが難しいかとか、何か問いかけや相談をしてくれたということを思い出した。

その振り返りの機会を与えてくれるというところが、個人的には、要の人として重要な部分かと思った。

【会長】

福祉の世界だと、割と相談支援という言い方をする。福祉では、最近何かの会議でも相談支援という言葉が目立つ。だんだん浸透してくるという感じだが、相談というイメージがかなりあって、今のご意見のとおり、社会教育の世界での相談というイメージが、かなりあるのではないかと思った。

【委員】

「要の人」という言葉は、生涯学習推進プランに掲載するための言葉なのか。自ら「要の人」です、とは名乗りづらい。学びの推進役が良いかと思うが、何の学びの推進役なのかわかりづらい。単純に生涯学習相談員などが良いのではないかと思う。

【事務局】

あり方検討の結果として報告書をまとめる。ここで議論いただいた言葉も報告書に載る形となる。プランに掲載されるかという点については、令和8年の改定時に改めて議論いただくこととなる。

【会長】

今、素案を議論しているところのその報告書に使われる言葉だが、その後、いろいろ流通すると思うので、委員がおっしゃったとおり、その名札をつけて講座に出るとか、そうなったときに、何か報告書に使った言葉のさらに愛称みたいなのを考えないといけないかもしれない。取りあえず、報告書に使う言葉として、一般の区民がそれを読んだときに中身がすっと理解できると、そういうふうにお考えいただくと良いと考えている。

【地域力推進部長】

先ほど事務局から説明したとおり、まずは報告書に載せるということが第一歩になるが、今、区の総合計画を策定している段階であり、生涯学習に関わることを計画事業の一つに位置づけることが想定される。その中で要の人というのが重要なファクターということになれば、その計画にも掲載されることになる。会長がおっしゃったように、その言葉が広がっていくということも念頭に置く必要がある。

【会長】

割と直感的に分かって、かつ親しみやすい言葉がいいと思う。後でそれ自体として議論する。もちろんそれについて意見をいただいても構わない。

【委員】

先ほど委員がおっしゃったように、文化振興協会を利用する団体は、文化センターを利用する団体と類似しているところもあり、高齢化、それからコロナによって活動が休止した等、色々な問題に直面している。

資料5 8ページの参考のところでも継続性、世代交代と書いてあるが、60代の人から50代、40代の人にバトンタッチできるかといっても、働いている環境であるとか、あるいは自由な時間がどれだけあるかということを見ると、世代交代というよりも、担い手の交代とか、そういう意味のほうが、現実的なのではないかと思う。

また、生涯教育、社会教育や学びという言葉が普通に使われるが、今までの説明の中でもやっていないことをやってみるとか、知りたいことを知るとか、単に学習というよりは広い概念の言葉だと思う。単に学びと言われると、学習というふうなイメージにつながってしまう。私自身も代案を持っているわけではないが、この学びという言葉についても、親しみやすい言葉が出てくれば良いと感じた。

【委員】

区民委員として出てきているので、区民の感想として発言したい。

初めに、いろいろな社会教育主事とか、指導員とか、社会教育士ですか、その資格を持っている人たちの話題があったが、こういう人たちが区民に対して教えるということは、何か上から目線でやられているみたいな感じがする。主役は地域の方々、住民だと思う。住民が学んで、活動しやすいように教えていく、一緒にやっていく、支えてくれる、黒子になってやっていただきたいと感じる。

それと、2点目は、範囲を限定するとすれば、やはり地域となる。大田区は大きくて、自治会レベルとか、歩いて数分単位のレベルという地域の範囲を考えると、そこで育った人たちは、その歴史、文化も知っているし、施設でどういうものがあるのかとか、どういう人がいるのか、何かがあったときにこの人に言えばこういうことを教えてくれるとか、住民の中で色々コミュニケーションする必要があるが、現在は残念ながらそれが途絶えている。地域のコミュニティを活発にする方々、そ

ういうつなぎ役の人たちが必要だと思う。

それで地域で働く、動くというか、活動するというのは、小学生とか学生は別として、大人になれば働いているときは会社勤めが大半なので、反対にリタイアした人達が地域で活発にできるようなふうに指導をしていくというか、一緒になって活動していくという、そういう人たちを地域の中で育てるべきではないかと思う。

【会長】

非常に重要な指摘をいただいた。まず、社会教育士等は法律に書いてある言葉。どうしてもかたい言葉になって、そういうかたさが上から目線の雰囲気を生み出すということで、ある種の言い換えが必要で、その意味でも黒子に徹する人みたいなイメージの言葉が生み出されると良いと思う。

もう一つは地理的な範囲、コミュニティエリアについて言及いただいた。大田区全体を管轄するものも必要で、それは生涯学習センターとなる。文化センターは、まさに地域レベルで、もっとコミュニケーションが高まるような、そういう動きをする要の人が必要というご意見で、まさにこの報告書は、それを目指して、提言をしようとしている。

【委員】

先ほど、いろいろ事例の説明を聞いているとき、また他の委員のご意見のときにも思ったことだが、PTA会長、副会長を合わせて10年間やり、そういう意味では地域を色々見ている。昨年度、自治会町会連合会の方たちとお話をさせていただく機会があった。

正直なところ、今の生涯学習のお話も、ターゲットがぼんやりし過ぎているのではないかと思う。文化センターを利用しているのは、子どものスポーツとかを別すると、年配の方が多いうのを捉えて考えていく必要がある。先ほどの事例のお話でも、地域の活動に参加し始めたときに、ご自身が会社でどういう役職だった等を重視する男性の方が多い。その方たちが対象なのではないかと思う。

そうなると、要の人というのも、自作で作られた名刺に書きやすいような名前のほうが良いと思う。生涯学習の推進役等、こういうのをやっていますというのが、そのままその方のアイデンティティにつながるような形にしていた方が良いと思う。

自治会町会の方々と話す場を設けていただいたのも、小学校、中学校の保護者が

自治会町会ともっと関わるにはどうしたらいいかという話だった。結論として、直接は無理という話になった。子育て中、現役で仕事している世代というのは、上の年代の方たちと時間の流れが違うので、(関わるのは) 難しい。どちらかというところ格好いい60代、70代、80代が集まっているのが自治会町会であり、生涯学習の場でも、次のステージで新しい学びをやっている先輩方が集まって輝くところみたいにして、それに次の世代が憧れて来るといった方がいいのではないか。

必ずしも60代、70代、80代で回っているところに20代、30代が入ることが良いこととは思わない。次のすぐ下の世代、これからリタイアされる方たちが入りやすい、入ってきたときも、いきなり肩書きが外れるわけではなく、長いスパンで入っていけるような形の仕組みを考えていくほうが良いと思った。

最後に、どんどん人の話になってきているので、私も過去2回受講した区民活動コーディネーター養成講座と同じことを言っている気がする。中心のところにはもちろん生涯学習という学習というのがあるのだろうが、それをつなぐ人がテーマになってきているので、そっち側(区民活動コーディネーター養成講座)でどういう結果があった、どういう使い方をしてうまくいっている、うまくいっていないところも、うまく取り込んでいったほうが良い。

【会長】

最後おっしゃった件は、私はよく、今や地域はコーディネーターだらけだと言っているが、あらゆる行政分野がコーディネーターと称する人を配置している。学校、社会教育、地域福祉、包括支援センターなど。コーディネーターのコーディネーターが必要なのではないか、確かにそういう調整は必要だし、地域の側でも、役所の側でも考えないといけない。

今日も副会長のお話の資料(中央教育審議会生涯学習分科会資料)でも、他の分野のことをかなり気配りして作られたと感じた。

それから、現役世代はなかなか昼間の活動に参加できないが、私がコロナの真っ最中にやった調査だと、僅かだが、現役男性が活動に参加している片鱗が見られて、やはりこの人たちというのは、平日の夜は無理で、週末、祝日、祝日に活動しているように見えた。こういう人も、少なくとも将来的な学びないし社会的活動について何回かチャンスが与えられるような仕組みが必要なのではないかと感じた。副会長から中間総括、感想をお願いしたい。

【副会長】

かなり多角的に意見交換できたと思う。イメージが大分見えてきたというところはあるが、どう言い換えるかと、その具体的な表現方法についてちょっといろいろアプローチの仕方があるなというのを今のご意見を伺っていて思った。分かりやすい、名乗りやすい、そういう形にしていく。学びというと学びがちょっと入り口を狭めてしまうというのものなるほどと思うし、一方で類似する様々なコーディネーター役みたいなものがある中で生涯学習のアイデンティティという意味を名称に込めるような要素もある。その辺をどういうようにエッセンスを入れるのが良いか。

役割について色々意見を言っていたので、そのエッセンスを含む表現方法は、どのようなものが良いか。やはり地域と学びというところにあると思う。今まで言っている要の人というのは、何となくイメージに近かった。それを外に出す表現、言語化して素案にまとめていくときには、議論で出てきた表現である要の人だと通じづらかったので、今日、こういうふうに表示し合ったこと自体すごく意味があったと思う。実際に、どういう言葉に置き換えるかという、なかなか、どの方向を取るかというところで悩ましいという感想を持った。

【会長】

機は熟したといえ、その話題に移りたい。実際、事務局としても頭を抱えて、三つの案が出ているが、これに限定しなくても良い。

この報告書に使われる言葉として、どういう言葉に変えたらいいかということについて、意見をいただきたい。

ちなみに、私は、地元は横浜市緑区で、今の横浜市では18区各區で、地域づくり大学校という、学んだことを生かして地域で活動してくださいねという形で提供している講座がある。私は、一応学長として関わっているが、10年続いていて、受講生の中からも運営側に携わってくれる人もかなり出てきている。二層構造になっていて、サポーターと言われる人とナビゲーターと言われるもうちょっとコアに関わる人と2種類ある。

自分のそういう経験からすると、ナビゲーターという言葉は良いかと思うが、果たして大田区の現実からして、そういう言葉がなじむのかどうか分からない。なじむ言葉を皆さんで考えていただきたい。

【委員】

行政の都合でボランティアをやってくれという時代が、これから5年後10年後も続くか。これは、学校と部活動でもそうだが、ただで指導者を欲しいとか、ただでボランティアをお願いしたいという時代じゃなくなっているときに、全く予算なしで行政の都合だけで何かやってくれというのは、なかなか難しいのではないか。

我々が若い頃は、社会は「We」、我々の社会だから、我々で何とかしようと。だけど、今は「I」。だから当然、自己中心であって、しかも主役じゃなくて脇役をやってくれ。それでいて、守備範囲があまり明確ではない。それから、立場もどういうことかあまりよく分かっていない。責任とか、権利というものがよく分かっていないのに、名称だけ考えろというのは、無理ではないかと思う。簡単に言ってしまうと、行政としてはソーシャルキャピタルが欲しい。ソーシャルキャピタルということは、おせっかいを焼いてくれる人が欲しい。ところが、ソーシャルキャピタルは、なかなか培養できないということが、もうこの20年間ぐらいよく分かってきた。

そういうことからすると、やっぱり仕組みを変えるような方向転換というのを行政もまず考える必要がある。我々のほうで言葉をいろいろ考えたとしても、定着をしなければ、役割としてなすような人はなかなか集められないのではないかという感じがする。

【事務局】

今の段階で（有償・無償に関する）予算のこととかというのは、なかなかお伝えすることはできない。これまで、地域の学びの場で活躍していただく人、自分が楽しみながら学びの場を広げていく人をどう育成したり、支援したりしていくかということを考えていただいていた。今後、その方の立場とか、条件というのは、具体化していく段階で明確にしていくが、一旦学びの場の役割の一つ、機能の一つとしてお考えいただきたい。

【会長】

無償か有償かという議論を、一応括弧に入れて、その機能面に即してお考えいただきたいという。有償かどうかは、私もかなり大きな話題で、ここを1年ぐらい私は、そういうふうに思っていて、講演するときも必ずその話題に触れるにし

ている。

自治会町会は、最大のボランティア団体。これが、有償性の原理を入れないと機能しなくなるのではないかと危機感を私も持っている。

その意味では、行政も発想を転換しないといけない時代ではないかと思うが、そこを、これは極めて大問題なので、一旦括弧に入れてもらって、機能面に着眼してお考えいただくというふうに、この場では協力いただきたい。

【委員】

P T Aの崩壊ということもある。なかなかP T Aがうまくいかないというのも、相手の好意に縋りつくという伝統なのか、もう古い伝統なのかという部分も含めて考え直さないといけない。

現状だけの話をしているのだったらこれで終わっても良いが、今後のことを考えてということであれば、ぜひとも一考に入れて、やはり予算の手だてを考えると、あるいは役職をちゃんと考えるとかというふうにしないと、人は動かない。そういうこともなしに、名称だけを考えろというのは、あまり建設的ではないというように感じる。

【会長】

ご意見として承って、ほかの方々も同じご意見であれば、この議論は一旦終わりになる。学校運営協議会などは、委員に謝金を出している。これは、総合型地域スポーツクラブもそうか。そうならないと動かないということは、今、かなり多くのところで進行していて、完全ボランティアなのは、民生委員等、昔からの特殊なケースになってきている。

【地域力推進部長】

事務局から補足させていただくと、この要の人については、これまでの会議の中で、だいたいこういった役割を担っていただきたいという議論があって、それを便宜的に要の人と表現してきたが、報告書でまとめる段においては、より適切な言葉を選定する必要があるということ、今議論いただいている。

したがって、現時点で要の人は固有名詞ではないので、あえて固有名詞を付けるか、その処遇をどうするか、その根拠をどこに求めるか等については、今後、具体化していく中で検討していきたい。

繰り返しになるが、事務局から申し上げたとおり、まずは機能面とそれにふ

さわしい名称、仮の名称ということになるが、それを議論いただきたい。

【会長】

というお願いが事務局からあったので、そういうものは考えにくいということであるが、あえて考えていただくと、こんなのはどうかという意見があればいただきたい。

【副会長】

今日の意見交換を踏まえると、ここでは、名称というよりも表現を今考えているのではないかと考えている。

ここに当たる人たちは、例えば、相談員、生涯学習ボランティア、地域学校協働コーディネーター、利用団体のリーダー、お祭りの実行委員等、色々な立場や関わりの人が入るが、職としてコーディネートしている人ではなくて、有償・無償は、一旦保留にして、比較的ボランティアな学ぶ人、地域の人に近い立場で、しかし、学びの裾野を広げてくれる、一緒に活動してくれる、少し先導してくれる人、橋渡しをしてくれる色々なジャンルの色々な立場の人たちをどう表現するかを考えるとということなのではないか。

これを例えば制度化したほうが良い、大田区らしい何か名称を付けて広げていったほうが良いというのは、次の議論なのではないかと思う。

ただ、「要の人」は中でしかわからない表現なので、どういう表現だと分かるのかと。素案に対する委員からのご意見でも、その「要の人」というのはわかりにくい表現だと思うので、「地域の学びと区民をつなぐ要の人」とか、「地域と学びの場をつなぐ要の人」等と、この委員は「要の人」を生かして言葉を足す形で表現をしてくださっているが、そういう包括する概念というか、「要の人」よりもう少し良いわかりやすい表現があるのではないか、その辺りの意見交換かと自分の中で整理ができた。

【会長】

要の人というのは、この検討会委員の中から出てきた表現なので、報告書を作るにあたって、対外的に分かりやすい表現にしたい。そういう意味で、ご意見をいただきたいと思うが、いかがか。

【副会長】

「学び」と付けたほうがいいのか、付けないほうがいいのかで悩む。大田区全域では

広過ぎるという関連で言うと、地域って付けたいと。

【会長】

だんだん長くなる。

【副会長】

両方付けると長くなってしまふ。

【会長】

他に議論いただきたいこととして、「養成」という言葉は、やや上から目線という感じもするので「育成・支援」と報告書で使う文言として言い換えてはどうかということで、この点についてはどうか。

【委員】

年齢的なことも考えたりすると、60代・70代の方が、「育成」とかというふうに言われると、おい、何だよと思うところがあるから、どっちかっていうと、「培養」ではないかと思う。ソーシャルキャピタルが欲しいわけだから、やっぱりそれは、「育成」とか、「支援」するのではなくて、「培養」という言葉が使われ。自分で研鑽しながら育っていくのか、あるいはサポートしてもらいながら、育っていくというふうな形で「培養」という言葉が良いと思う。

【会長】

「培養」一語ということか。「培養支援」ではなく「培養」にするということか。

【委員】

「培養」で良い。そういうふうな芽がないと多分育たない。やる気のない人に一生懸命集まれって言っても無理があるので、できそうな人、あるいは興味のある人たちを上手に育てていくようにしようとすると、培養するような働きかけを行政がしていく形になる。

【会長】

そのような意見があったが、いかがか。

【委員】

先ほど、「培養」という意見があったか、それに関連して「醸成」いかがか。ソーシャルキャピタルという話が出ていたので、ソーシャルキャピタルを作るというのは、「醸成」と使われることが多い。

また、土に例えると、醸し出していくというか、全体を作り上げていく、その相

互関係で作り上げていくというニュアンスが合っているので「醸成」という言葉は良いと個人的に感じた。

【会長】

「醸成」という言葉は、割とこれまでも、政策用語として使われてきた経緯はある。コミュニティの醸成という。私は、個人的にはその生き方はあまり好きではない。

それが適切であると思われるのは、一理あると思う。今でも使われている。他にはいかがか。色々なイメージがある。

【委員】

言葉の問題とは違うが、生涯学習サポーター養成講座について気になるのが、私も十数年前参加したが、毎年何かテーマが変わってやっていた。育成をしていくということであれば、継続性が大事だと思う。

経験のない方にまず基礎編を毎年の年間計画で行い、その後、基礎編を出た人が、何年間か実践編をやるサイクルを回してほしい。その後、実践の場を作るということで、継続させる。

やはりある程度の世代交代ということで、世代交代の仕方をどういうふうにするのかというような、一貫した、単年度で思い付きのテーマでやるのではなくて、常に同じテーマでもいいと思う。

内容は若干変えていくにしても、基本コースを固め、毎年同じことを行い、人が変わり、世代交代するという仕組みをつくっていただきたい。

【会長】

今のご意見は、実は、後で話題にしようと思っていた文化センターの在り方のイメージに関わるご意見として、事務局で整理すると思う。

他にいかがか。

【委員】

中身的なことを考えると、「培養」「醸成」等も適切だと思うが、万人がわかる言葉、分かりやすい言葉というのも大事だと思うので、そういう面では、「育成支援」というのは、非常にイメージがしやすい言葉だと思う。「育成支援」と言い換えることに私は賛成する。

【会長】

それでは、「要の人」について、今日は、結論が出なかったが、幾つか考え方が出たので、再度整理してもらおう。

それから、「育成支援」については、賛否あったが、両方出してもいいとも思う。「育成支援」、「醸成培養」等。事務局はいかがか。

【事務局】

¹本日議論いただいた内容をふまえ、整理していきたい。

【会長】

副会長、まとめ、感想があればお願いしたい。

【副会長】

皆さんのそれぞれのお立場から意見いただいて、考えさせられる、表現一つとっても、これまで議論してきた中身をどのように表現すれば、一番エッセンスが伝わって、事業や、実際の実践につながっていくのかという観点で意見をいただいたので、かなりリアリティを持って、共有できるような表現をというところのベースは、理解し合えたと思う。

【会長】

今日は、活発な議論をいただいた。

有償ボランティアについて、最近ある市で地域コミュニティの研究をやっているが、プレイパークについて話を聞いた。プレイリーダーは、通常は、自治体が給料をちゃんと正規の雇用として、給料を出すべく予算を組むが、その市は有償ボランティアで時給1,000円。ボランティアとしてはかなり高い。こういう合意がすでに形成されていると感じた。

他方で、別の市で地域包括ケアの講演をすると、有償ボランティアは少し抵抗があるという意見がまだある。特に、福祉を学んで活動された方には。

今は、非常に流動的で過渡期だが、全部無償で支えられるというふうには、だんだんなくなっているように感じている。そこは、よく考えていかないと、地域と行政とのパートナーシップというときに、なかなか人手が満たせないということにもなりかねない。今日、話題になったので、私としても勉強になった。

¹ 会議では、一つの表現に絞り込むに至らなかったが、本件について議論された内容は事業化の段階で考慮すべき点が主であったため、出席した委員の承認のうえ、報告書上は「ナビゲーターの育成・支援」と表現することとした。

本日の議事はこれで終了する。事務局にお返しする。

3 閉会

【地域力推進部長】

本日は、ご多忙の中お集まりいただき、また、活発な議論をいただき感謝申し上げます。

様々なお立場、ご経験から、なかなか行政だけでは生まれない発想、発言をいただき、ヒントになるものが多く、感謝申し上げたい。

有償・無償の議論があったが、この生涯学習という分野は、地域共生社会の中での地域づくりとの循環を考えると、私ども行政だけの都合ではなくて、地域の中で区民自らが生きがいを見出していただく、あるいは地域の活性化のために自律的に活動していただくという観点も加味して、有償がいいのかあるいは無償がいいのかを判断する必要がある。無償でなければ、意義を損なってしまうこともあるので、要の人の役割を明確化していく中で具体化していきたいと考えている。

また、副会長からあった「言葉」というよりも「表現」だということは、考え方の前提をうまく整理していただいたと思っている。今日、一つに絞って決めることができなかったが、いただいた意見を参考にしながら、より適切な表現を見出していきたい。

途中で申し上げたが、大田区の現状として、昨年度、大田区の基本構想を15年ぶりに策定して、今年度は、これを具体化し、区の施策全体の方向性を形づくる基本計画を策定している最中である。この中で各分野において目指すべき方向性、その方向性に沿った具体策をこれから検討していくところだが、一つの分野だけでなく、分野をまたがる共通の課題として少子化、つながりの希薄化、それから担い手不足が挙げられている。まさにこの生涯学習分野においても、それぞれ濃淡はあるが、こうした課題が重なると感じた。

生涯学習を推進するなかで、そういった大田区全体の課題解消にもつなげていきたいと思うので、引き続き議論いただきながら、大田区政に尽力賜りたい。

【事務局】

次回、第6回推進会議は、1月31日金曜日14時から大田区役所本庁舎にて予定している。本日の協議内容を反映させた最終案を12月中にお送りするので、

最終確認をお願いしたい。本日の内容について、追加の意見等あれば、意見書をお送りいただきたい。以上をもって閉会とする。

4 委員からの追加意見

- ・ 要の人のイメージについて、事務局案に加えて他者の地域での学習を量だけでなく、質を高める人という像を持っている。具体的には、講座や実践などのプロセスにおいて、「振り返り」を学習者に促すことが、要の人に求められていると考えた。
- ・ 「要の人」の言い換えについて、地域活動の支援者が望ましいと考える。支援という語は、①自分が活動しながら②他者の活動を支えるの意がある。この意味は、「要の人」のイメージを捉えていると思うため、“支援者”という語が適切と考えられる。“学習”という語は、住民になじみにくいいため、“地域活動”と住民目線に立った言葉を選んだ。
- ・ 人材育成については、生涯学習担当、区民協働担当それぞれが、講座を行っている。これらの講座を連携し「学び」から「活動」につながるようにしていただきたい。私は両講座を受講したが、区民協働担当の講座の方が、実践的で事例紹介や見学などもあり活動につなげやすい。生涯学習担当は、「きっかけ」作りと「学び」が重要であることを具体的に示して欲しい。
- ・ 学校現場からは見えにくい課題であり、協議の中で意見を出すのは難しい。私自身は、今年度スタートした第4期大田区教育振興基本計画とのつながりが今ひとつと感じる。その個別目標8「生涯学び続ける環境をつくり出す」となっている。しかしその内容は、本推進会議の内容とつながっていない。教育委員会との連携を充実させ、相互の関係性を重視することが重要だと感じている。（学校を代表する立場として）

以上